資料

読み解き！

日露戦争の風刺画

解説　長井 伸仁

※全体図（カラー）は巻頭図版参照。

本資料は、フランスの日刊紙『プチ・パリジャン』の「絵入り文芸付録」1904年４月３日（日曜）号に、第一面全体を使って掲載された絵である（教科書『わたしたちの歴史　日本から世界へ』〈歴総709〉p.58に掲載）。

『プチ・パリジャン』は1876年に創刊され、1944年まで刊行された。創刊時に共和派の国会議員が中心になっていたために共和派紙とみなされることもあるが、労働者や農民などをおもな読者とする大衆紙の性格が強かった。

フランスでは19世紀後半から20世紀初頭にかけて、識字率の上昇を背景に新聞・雑誌の発行部数が急速に増加し、内容の多様化も進んだ。そのなかでも『プチ・パリジャン』は発行部数において突出した存在であり、1912年には140万部を記録している（当時のフランスの人口は約4100万人）。これにつぐ発行部数の『プチ・ジュルナル』が約84万部、政治記事で定評があった『タン』や今日も刊行されている『フィガロ』に至っては４万部にも満たなかったことを考えると、『プチ・パリジャン』の影響力の大きさがうかがえる。ちなみにこの頃の同紙は「世界でもっとも発行部数の多い新聞」を自称し、題字の下にそれを明記していた。

影響力には販売価格も関係していた。1904年時点で同紙の単価は５サンチーム（１サンチームは100分の１フラン）、週刊であった「絵入り文芸付録」も同じく５サンチームだが、当時のパリにおける男性日雇い労働者の日当が５フラン程度であったことを考えると、相当に安価だったといってよい。ちなみに高級紙に分類される『タン』や『フィガロ』は15〜20サンチームであった。

読み解き

絵の題材は日露戦争であり、それが格闘技になぞらえて描かれている。交戦国であるロシアと日本は選手としてリングに立ち、関係国は観客としてリング脇に座っている。

ロシアのトランクスには「ヨーロッパのチャンピオン」、日本のそれには「アジアのチャンピオン」とフランス語で書かれている。リングの床には東アジアの地図が広げられ、その上でロシアが両足を「満洲」に載せているのに対し、日本は「日本」から右足を「コリア」に踏み出している。

観客について述べると、向かってロシアの右に、シルクハットを被り腕組みしている男性がイギリス、その背後で星条旗が描かれた帽子を被り右手

で握り拳をつくっている男性がアメリカ合衆国、日本の右に、軍服を着て角状の頭立てがある兜を被っている男性がドイツ、ロシアの左に、左手を膝に載せ頬杖をつく姿勢をとっている女性がフランス、そのフランスのすぐ背後で四角い帽子(トルコ帽)を被りフランスと同じ方向をみている男性はオスマン帝国と思われる。背景にある塀の上から試合をのぞいているのは中国(清)であろう。

国を人間に見立てて国際関係を描いた絵としては、たとえばナポレオン戦争期の風刺画で、ピットとナポレオンが向かいあって食卓に着き、皿の上にある地球を切り分けている絵がよく知られている。本資料に登場する国々は、そのような現実の人間ではなく、国を象徴する架空の人物である。そのなかでフランスとイギリスとして描かれている人物は、この頃には図像の寓意(アレゴリー)として定着していた。フランスを表す女性は、名前の由来は不明であるが「マリアンヌ」と呼ばれ、フランス革命期に自由や共和政の象徴として登場した。その特徴の1つはパイロット帽のような帽子を被っていることであるが、これは古代ローマの解放奴隷が目印として被っていたとされる「フリジア帽」であり(実際に解放奴隷を識別できるものとして広まっていたのかついては議論がある)、フランス革命期になると専制への抵抗の象徴として広まった。イギリスを表す男性は「ジョン・ブル」という名をもつ。18世紀初め、スコットランド出身の風刺作家の作品にジョン＝ブルなる人物が登場したことが起源とされるが、18世紀末頃からイギリス人、とりわけ「愛国心をもつイギリス人」を表すようになる。このように、国が君主や有力政治家などではなく架空の抽象的な人物によって表現されるようになったことは、政治の民主化や国民国家としての性格の強まりと軌を一にした現象と考えられる。その限りでは当時の西ヨーロッパの趨勢を反映しているといえよう。

この絵でもう1つ注目したいのが、スポーツの場面として描かれていることである。現在、スポーツの国際試合はナショナリズム発露の場でもあり、国家間の戦争にたとえて語られることも珍しくない。この絵では、戦争がスポーツの試合にたとえられている点では今日のスポーツの位置の裏返しといえるが、そもそも現在のスポーツの多くは19世紀から20世紀にかけてルールが確立し競技団体の組織化が進んだものであり、その点でもこの絵は時代を反映している。

ところで、この絵のスポーツは何なのか。資料の別ページに掲載されている解説文には「レスラー」の語があり、レスリングの可能性が高い。フランスでは、19世紀半ばから20世紀初頭にかけての時期、スポーツが普及し学校教育でも体育の充実がはかられる。レスリングは、この時期にルールが確立されるものの、民衆向けの興行としての性格を強くもっていたこともあり、ほかのスポーツからは距離をおかれていた。本資料を読み解く際には、そのようなレスリングの性格をも念頭におく必要があるだろう。ちなみに、1904年10月にイギリスの文芸誌に掲載された論説には日露戦争の日本を「重量級のチャンピオンに立ち向かう軽量級のボクサー」にたとえる記述があり❶、両国を大きな体格差がある格闘技選手に擬すること自体は突飛なとらえ方ではなかったようである。

以上の文化的要素を確認したうえで、この絵のなかで日露戦争や国際関係がどのようなものとして描かれているのかを検討してみたい。

本資料が刊行された1904年4月3日は、日露戦争の開戦から2カ月が経過した頃であり、大規模な戦闘が発生する以前である。絵の2国も相手の出方を見ているようで、その意味では実際の戦局に忠実といってよい。

日本はロシアに向かって素手の両手を差し出す格好をしているが、これは当時のレスリングでは一般的な防御(ガード)の構えに相当する。ロシアは日本を悠然と待ち受けているようにみえるが、

その両腕が後ろに組まれていて様子がうかがえないことに、何か重要な意味が込められているのかもしれない。日本が素足であるのに対してロシアがそうではないことも同様である。これらについては、解説文にも手がかりはない。

絵の下には「白人と黄色人」(いずれも複数形)というタイトルが記されている。欧米の多くのメディアは日露戦争を人種対立にもとづく戦争とみなし、とくにロシアでは欧米諸国内に親ロシア世論を醸成するねらいからそのような見方を強調する傾向があった。その背景に19世紀末から強まる黄禍論があったことは間違いない。絵のタイトルもそれを示唆するほか、解説文にも「ミカドの兵士たちが勝利すれば、黄禍と呼んできたものが現実に突発してしまうことは避けがたい」とある。

しかし、この絵を黄禍論だけで読み解くことは難しいと思われる。たしかに日本も中国も小さな存在にされているが、少なくとも日本に関しては否定的にのみ描かれているようにはみえない(ゴリアテに立ち向かうダヴィデを想起させるとは、言い過ぎであろうか)。実際に、日露戦争に関しては欧米の一部に親日本的な世論が存在していた。イギリスでは日英同盟の相手国として、スウェーデンではロシアの脅威の裏返しとして、日本を支持する風潮があり、アメリカ合衆国などでも「小国」日本を庇護するべきとの論調があった。フランスは、従来の露仏同盟により親ロシア感情を基調としていたが、日露戦争中に英仏協商を締結したことから日本は明確な敵国ではなくなるうえに、戦局において日本が優勢になるにつれ、日本をあなどれない存在とする言説も目立つようになる。

もう一段深めるために

歴史の教科書には資料として多数の絵が掲載されている。場景を写実的に示そうとするもの、人物やできごとを理想化・美化するものなど様々であるが、風刺画は対象を批判的にとらえていることが特徴である。

風刺画自体も多様である。横たわる平民を踏みつけて立つ聖職者と貴族を描いたフランス革命期の絵や、進化論を提唱したダーウィンを猿として描いた絵などは、批判の対象と視点がはっきりしている。一方、ケープ植民地首相セシル・ローズをアフリカをまたぐ巨人として描いた絵や、魚に見立てた朝鮮半島を釣り人である日本・中国(清)・ロシアがねらっている絵などは、どのような視点なのかがかならずしも明確ではない。この点で、本資料は何に対して批判的な眼差しを向けているのであろうか。「黄色人種」が国際舞台に出てくることなのか、その力をロシアはじめ欧米諸国が軽視していることなのか、欧米諸国がそれぞれの利害から協調した行動をとれないことなのかなど、複数の解釈が可能であろう。

一般に風刺画は、しばしば婉曲的なかたちで批判をおこなうことから、その考察には描かれた時代について幅広く知識を得ておく必要がある。また、1枚の絵によって多くの情報を伝えるため、細部にも重要な意味が込められていることが少なくない。本資料の場合、ドイツを表す人物は男性軍人であるが、じつはドイツにもフランスの「マリアンヌ」と同じように、「ゲルマニア」と呼ばれる女性寓意が存在した。男性軍人が用いられていることは、外交上敵対関係にあったことを反映している可能性もある。

風刺画は、一見単純明快であるようでいて、情報量の多さと批判の鋭さにおいては、多くの語をつぎ込んで書かれる論説に劣らないこともある。授業でも、機会があればそのような観点から考察をおこなうことも有意義であろう。

❶Alfred Stead, «The War and International Opinion», *The Fortnightly Review*, vol. 82, October 1904, p. 652. Cf. 飯倉章「パターナリズムのなかの日本——日露戦争と欧米の日本イメージの変遷」(日露戦争研究会編『日露戦争研究の新視点』〈成文社、2005年〉p.234)。

(ながい・のぶひと／東京大学大学院人文社会系研究科准教授)